

---

## 芭蕉に思いを馳せる

仲善・満濃中 川上 健吾

---

### 1 はじめに

2022年のPISA調査の結果が公表され、日本の読解力について様々な議論が交わされている。しかし、私の教室での一場面を思い返すとき、読解力とは単なる文字の理解を超えた、もっと深いものではないかと考えさせられる。

### 2 松尾芭蕉に思いを馳せる

それは『おくのほそ道』の冒頭、「月日は百代の過客にして、行かふ年もまた旅人なり」を読んだ時のことだった。現代語訳を確認した後、ある生徒が思いがけない発言をした。「先生、これって私たちが正月に『ゆく年くる年』って言うのと同じような意味なんですか？」

教室が一瞬静まり返った後、別の生徒が「でも、芭蕉さんの方が深いと思う。時間そのものが旅をしているって言うてるから」と続けた。

そこで私は李白の『春夜桃李園に宴す』の一節を紹介した。すると、いつも独特な解釈で周囲を驚かせる生徒が突然、「あれ？ほとんど一緒じゃないですか。芭蕉は李白の一節をパクったんですか？」と率直な疑問を投げかけた。

「では、なぜ芭蕉は李白の表現を意識したような書き方をしたのでしょうか？」と問いかけると、教室は沈黙に包まれた。やがて、一人の生徒が小さな声で「もしかして、自分の気持ちを伝えるのに、昔の有名な人の言葉を借りた方が、より深く伝わると思ったんじゃないですか」と答えた。

その瞬間、私は背筋が震えるような感動を覚えた。読解力とは、このように時代を超え

て、まるで共鳴するような言葉の力を感じ取り、その意図を深く理解する力なのだ。PISA調査の結果に一喜一憂する前に、まずは目の前の生徒たちが見せる、このような深い学びの瞬間を大切にしていきたいと思う。

このような教室での対話を通じて、私は国語教育の本質的な意味を改めて考えさせられた。確かに、基礎的な読解力や語彙力は重要だ。しかし、それ以上に大切なのは、言葉を通じて人々の思いや経験を理解し、共感する力を育むことではないだろうか。

古典文学は、単なる暗記の対象ではない。そこには、何百年もの時を超えて、私たちの心に直接語りかけてくる、古の詩人から現在の私たちへと、変わらずに受け継がれた心の在り方がある。芭蕉が李白の表現を意識したように、私たちも先人たちの言葉を借りながら、自分の思いをより豊かに表現することができる。

また、生徒たちの予想外の気づきは、教員である私にも新たな発見をもたらしてくれる。彼らの素直な疑問や洞察が、時として教科書には書かれていない深い理解へと導いてくれるのだろう。

国語の授業で目指すべきは、テストの点数を上げることだけではない。生徒たちが自分の言葉で考え、感じ、表現する力を育むこと。そして、時代を超えた対話の中で、新たな気づきを得る喜びを体験させることこそが、真の読解力を育む道なのではないだろうか。

これからも私は、教室という小さな空間で、生徒たちとともに言葉の持つ無限の可能性を探求していきたい。そこには必ず、PISAの調査では測れない、かけがえのない学びの瞬間が待っているはずだ。